

読書記録シート

読書番号 15 氏名 有田 志子

記入年月日 2003 年 6 月 22 日

題目(書名・論文名) コミュニケーションとしての要約

著者 邑本(おうもと)俊亮

出版社 第66回日本心理学大会 出版年 2002 ページ数 p820

書籍のありか 北海道教育大(函館校)

関連する箇所

仮説；読み手を意識した場合は、要約する際に原文依存率が減るのではないか。

方法；読み手を意識した場合としない場合

結果； 実験は小規模であるが、そのうち、3名は、読み手を意識すると原文に頼らず自分の言葉で文を書き、積極的に推論して文章の間を補うという結果になった。

自分の意見

新しいものではない。文章を書く熟達者は、より読み手を意識するということは知られていて、読み手を意識した文章のほうがわかりやすいことも知られていた。

では、その「わかりやすさ」とはなんなのかにふれたものだ。

原文そのまま＝わかりにくい。自分の言葉で一貫して説明することがわかりやすさにつながる。 また、文と文の間の論理の飛躍などを既有知識によって推論し、補うことがわかりやすさにつながる。

要約産出をコミュニケーションの一部として捕らえていく。

確かに、人にわかりやすく簡潔に説明しようと思うと、あらかじめ要約ができてなければ話せない。